

TZ 〈ほんの窓〉

第45号(2017.7.18) 一橋大学附属図書館高本善四郎氏助成図書コーナー「本の紹介」班

※詳細情報を http://www.lib.hit-u.ac.jp/pr/reading/tz/html/tz_045.html に掲載しています。併せてご参照ください。

ニーチェと音楽



ドイツの哲学者フリードリヒ・ニーチェ(1844.10.15-1900.8.25)は、最初の著書『悲劇の誕生』(1872)でディオニュソスの／アポロンのという芸術理論上の画期的な概念を提唱しました。ニーチェにとって音楽は、単なる道楽や余技の域をはるかに超えて、彼の哲学の本質に関わるものでした。ニーチェと音楽の関係を示す図書や、著書の代表作『ツァラトゥストラはこう語った』などを展示しています。

1. Ohne Musik wäre das Leben ein Irrtum 「音楽がなければ人生は一つの誤謬となるにちがいない」¹⁾

「よく家の玄関や居間の壁に、《音楽のない人生など誤謬にすぎない》という箴言を収めた小さな額がかけられていることがあるが、これはニーチェの言葉である」²⁾。「彼のピアノ演奏、とりわけ即興演奏は、社交の場に集まった人々を魅了した」³⁾。職業として音楽家になろうと考えていたこともありました⁴⁾。作曲した作品数は70曲以上にものぼります⁵⁾。自伝『この人を見よ』で自作を年代順に解説していく中では、「もしかしたら『ツァラトゥストラ』は全編が音楽であると考えてもいいかもしれない」⁶⁾と述べています。



ピアノを弾く哲学者 / フランソワ・ヌーデルマン著；橋明美訳。太田出版。2014

「音楽と比較して、言葉による伝達はすべて恥知らずな性質を持っている」⁷⁾。「ニーチェは言葉への徹底した不信を語っていた。どのようにしても言葉は物と一致せず、言葉は存在の世界に到達し得ないという事実をくりかえし、初期から晩年にいたるまで、あらゆる場面で語りつづけていた。」⁸⁾

【展示図書】

No	著者名・書名・出版情報	請求記号
1	『ニーチェ全集』14. 東京：筑摩書房, 1994(ちくま学芸文庫)より 原佑訳『偶像の黄昏』の「箴言と矢」33(p.24)	1080:9:14
2	フランソワ・ヌーデルマン著；橋明美訳『ピアノを弾く哲学者：サルトル、ニーチェ、バルト』東京：太田出版, 2014(at プラス叢書；07)(p.70)	1300:2065
3	西尾幹二『ニーチェ』東京：国書刊行会, 2012(西尾幹二全集；第4巻)(p.534)	0800:126:4
4	『ニーチェ全集』15. 東京：筑摩書房, 1994(ちくま学芸文庫)より 川原栄峰訳「一八六八—一九〇九年の記録」(p.437)	1080:9:15
5	渡邊二郎, 西尾幹二編『ニーチェを知る事典：その深淵と多面的世界』東京：筑摩書房, 2013(ちくま学芸文庫, [ワ3-6])より p.528-535 海老沢敏「ニーチェの作曲：生への祈り」(p.531-532)	1300:2087
6	ニーチェ著；丘沢静也訳『この人を見よ』東京：光文社, 2016(光文社古典新訳文庫；[KBニ1-5])(p.148)	0800:110:Bニ1/5
7	『ニーチェ全集』第2期第10巻. 清水本裕, 西江秀三訳「遺された断想(1887年秋-88年3月)」東京：白水社, 1985より 1887年秋の遺稿 10[60](188)(p.200)	OAe:128:2/10
8	西尾幹二『光と断崖：最晩年のニーチェ』東京：国書刊行会, 2011(西尾幹二全集；第5巻)(p.527)	0800:126:5

2. Doch alle Lust will Ewigkeit 「しかし全ての悦びは永遠を欲する」

スタンリー・キューブリック監督のアメリカ映画「2001年宇宙の旅」(1968)の冒頭で鳴り響くのは、リヒャルト・シュトラウス(1864-1949)の交響詩「ツァラトウストラはこう語った」(1896)です。各部分の標題は、ニーチェの原作の並び順のままではなく、前後に行きつ戻りつしています。自分は哲学的な音楽を書こうとしたのでもなく、あるいはニーチェの偉大なる著作を音楽で描こうとしたのでもない、という作曲者自身の発言(口うるさい批評家たちをけむに巻くため?)を真に受けてか、原作の内容に無頓着な楽曲解説もしばしば見受けられます。たとえば「世界の背後を説く者について」Von den Hinterweltlernを「後の世の人々について」と訳しては、実在する現世の背後に彼岸的なアイデア世界を仮構するキリスト教への批判の意味と食い違つて的外れです。最後の「夜のさすらい人の歌」では、第4部の「酔歌」に対応して真夜中を告げて鐘が12回鳴ります。原作の対応箇所を参照しながら聴けば、ニーチェを熟読し深く共感した作曲者⁹⁾が選りすぐったダイジェストが読めます。



シュトラウスよりも4歳年長のグスタフ・マーラー(1860-1911)の交響曲第3番(1896)の第4楽章の歌詞は「酔歌」の末尾第12節です。シュトラウスよりも2歳年長のフレデリック・ディーリアス¹⁰⁾(1862-1934)の「人生のミサ」Eine Messe des Lebens(1905)は演奏時間約100分、『ツァラトウストラ』の原文の抜粋をそのまま歌詞として歌いますが、排列は大幅に組み換えられています。舞踏を讃え、泣いて笑って、大いなる正午を経て永遠回帰に至ります。女性に擬人化された「生」Lebenが恋敵の「知恵」Weisheitに負けまいと意地を張ってツァラトウストラをめぐる三角関係を演じます。

知識ゼロからのニーチェ入門 / 竹田青嗣, 西研, 藤野美奈子著, 幻冬舎 2012

【展示図書】

No	著者名・書名・出版情報	請求記号
9	田代権『リヒャルト・シュトラウス：鳴り響く落日』東京：春秋社, 2014 (p.121-125)	7600:1115
10	中沢新一著；山本容子[絵]『音楽のつましい願い』東京：筑摩書房, 1998, p.87-100「ニーチェ的：フレデリック・ディーリアス」	7600:1129

引用文献以外の展示図書

11	『ニーチェ全集』第1期第1巻. 浅井真男, 西尾幹二訳「悲劇の誕生：あるいはギリシャ精神と悲観論；遺された著作(1870-72年)」東京：白水社, 1979	OAe:128:1/1
12	ニーチェ；森一郎訳『楽しい学問』東京：講談社, 2017(講談社学術文庫；[2406])	0800:34:2406
13	ニーチェ；手塚富雄訳『ツァラトウストラ』1,2. 東京：中央公論新社, 2002(中公クラシックス；W17,W20)	高本/1Ni:1J/1 高本/1Ni:1J/2
14	Also sprach Zarathustra. Zürich：Manesse, c2000 (Manesse Bibliothek der Weltliteratur) ※ドイツ語原文	高本/1Ni:1G
15	Thus spake Zarathustra. McLean：IndyPublish.com ※英語訳	高本/1Ni:1E
16	Ainsi parla Zarathoustra. Paris：Editions Payot & Rivages, c2002 (Rivages poche/petite bibliothèque；394) ※フランス語訳	高本/1Ni:1F
17	ニーチェ著；原田義人[編]訳『若き人々への言葉』東京：角川書店, 1997(角川文庫)	高本/1Ni:3J
18	いしいひさいち『現代思想の遭難者たち』東京：講談社, 2016(講談社学術文庫；[2364]), p.39-44「ニーチェ」	0800:34:2364
19	杉橋陽一編著『ニーチェ』東京：筑摩書房, 2000(快速リーディング；1)	1300:913
20	竹田青嗣, 西研, 藤野美奈子『知識ゼロからのニーチェ入門』東京：幻冬舎, 2012	1300:2085
21	西尾幹二『ニーチェとの対話：ツァラトウストラ私評』東京：講談社, 1978(講談社現代新書；501)	108:167
22	氷上英廣『大いなる正午：ニーチェ論考』東京：筑摩書房, 1979	0800:30:219
23	氷上英廣[ほか]『ニーチェ ツァラトウストラ』東京：有斐閣, 1980(有斐閣新書．古典入門；D-45)	0800:30:219
24	村井則夫『ニーチェ：ツァラトウストラの謎』東京：中央公論新社, 2008(中公新書；1939)	0800:25:1939
25	ディートリヒ・フィッシャー=ディースカウ著；荒井秀直訳『ワーグナーとニーチェ』東京：筑摩書房, 2010(ちくま学芸文庫；[フ31-1])	7600:1128